

◆興福寺中金堂院回廊の調査 ―第308次

1. はじめに

本調査は、昨年度の中門跡（第297次）に引き続き、興福寺境内第1期整備事業による第2年次にあたる。発掘区は東西55m×南北19mの長方形平面に東西22m×南北20mを突出させたL字型をなし、中金堂と中門をむすぶ回廊の東北隅と、中金堂前庭部、さらには東僧房の南西端を含む面積約1,485m²について調査をおこなった(図32)。調査期間は1999年10月5日～2000年2月16日。なお、本調査の概要は、すでに『興福寺 第1期整備事業にともなう発掘調査概報Ⅱ』（興福寺 2000）として報告しているので、ここでは事実記載を中心にその概要を述べたい。

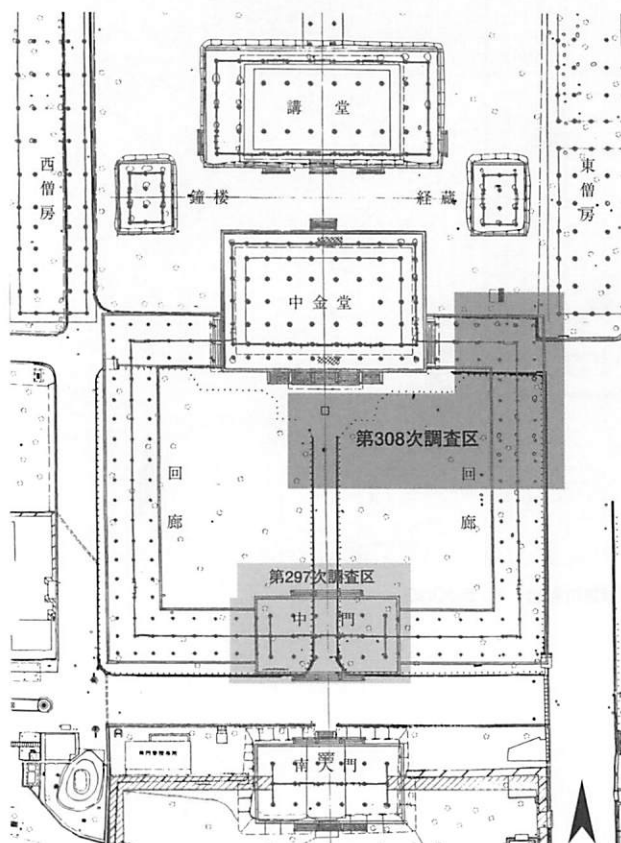


図32 調査区位置図 (1:1500)

2. 中金堂院の歴史と回廊の建築

山階寺を起源とする興福寺は、飛鳥の地に移って厩坂寺と号し、さらに和銅3年(710)の平城遷都によって、平城京左京三条七坊の地に建立された。平城京における興福寺の創建については明確でない。興福寺の名が歴史上はじめて現れるのは、『続日本紀』養老4年(720)10月17日条にみえる「始めて養民、造器および造興福寺仏殿の三司をおく」という記事だが、これを興福寺造営の端緒とは考えず、造営あるいはその計画が進んでいたときに、官寺として造営することが決まったことを示すものと理解する説が有力のようだ。中金堂と中門をむすぶ回廊で囲われた区画を中金堂院とよぶ。この一郭は永承元年(1046)の火災をはじめ、平安時代にこのほか3度(康平3年(1060)・永長元年(1096)・治承4年(1180))、鎌倉時代に2度(建治3年(1277)・嘉暦2年(1327))焼失し、そのたびごとに再建を重ねている。しかし、享保2年(1717)におきた7度目の火災の後には、回廊や中門は再建されなかった。

回廊もほぼ興福寺の創建当初頃に建立されたと考えられている。古記録や古絵図、地上での遺存礎石の観察などから、回廊は複廊で、その柱間を扉とした小門が各面二つずつ開くと考えられてきた。ところが、遺存礎石位置の測量成果を加えて興福寺の伽藍配置を復原した大岡實は、東西面回廊の桁行寸法が文献と整合しないのを、「後世柱間が変更された」ためと解釈しながらも、「将来の検討にまきたい」としていた。

ところで、東京国立博物館所蔵の『興福寺建築諸図』と一括された建築図面のなかに、回廊の平面図と梁行断面図がある。これは享保焼失前の実測図、つまり嘉暦2年の焼失後に再興された回廊を描いたものである。享保焼失後、回廊は再建されないものであるから、調査では少なくともこの図と一致する遺構の検出が期待された。

3. 検出した主な遺構

中金堂院回廊

回廊付近は、中門東半下部で発見した谷地形が前庭部東北端方向にのび、北面回廊付近ではバラス混じりの地山が現れる。東面回廊基壇は、この谷を埋めた整地土上につくられており、版築埋土の状況から創建当初のものと解釈した。また当初版築の上層には、部分的に基壇改修と考えられる土層も確認できる。一方、北面回廊の基壇は地山削り出しとする。

礎石は基壇上に16石残り、他の17ヶ所では抜取穴を検出した。礎石および抜取穴の周囲には平面が約1.4～2.0mの方形を呈する据付穴があり、深皿状の掘り込み最下部に人頭大の根石を入れ、層状をなす地業を施しながら礎石を据えている。据付穴は大部分の箇所ですでに1回しかなく、礎石・基壇ともにほぼ創建当初のまま使用してきたと考えてよい。礎石は径0.9～1.2mほどの自然石（三笠安山岩が多い）で、現状では円形の造り出しや出柵の加工を施した痕跡はみられない。礎石上面の標高は、東面回廊南端部で95.6m、北面回廊西端部で95.9mである。

SC7500 東面回廊。現地地表下約25cmで遺構検出面である創建版築の上面に達する。東側の基壇外装・雨落溝は大部分が破壊されているが、西側にはよく残る。東面回廊は桁行7間分（隅部を含まず）を検出し、桁行3.77m（12.7尺；奈良尺。以下同）、梁行3.55m（12尺）の複廊である。北面回廊と交差する隅部分の柱間寸法はすべて12尺。棟通りには幅23～28cmほどの流紋岩質凝灰角レキ岩（二上山～ドンズルボー産。以下、凝灰岩Aと呼称）製の地覆石を2列に並べており（SX7501）、間仕切り最下部を構成する地覆と地長押を受けるものと考えられる。一方、回廊基壇西側では基壇地覆石列SX7502と玉石組雨落溝SD7503、雨落溝外側の玉石敷きSX7504を検出した。SX7502は流紋岩質溶結凝灰岩（奈良市地獄谷周辺産。以下、凝灰岩Bと呼称）製の切石で羽目石を載せる仕口などはみられない。SD7503は、SX7502を東の側石として溝底に河原石を2石分敷き、西の側石にやや大きめの玉石をならべた溝で、底をSX7502天端よりも約5cmほど低くする。SX7504はSD7503の西側に約90cm幅で玉石を4～5石分ならべた石敷きで、西端の石は面をそろえて見切りとしている。これらは南面回廊の調査成果とほぼ同じ

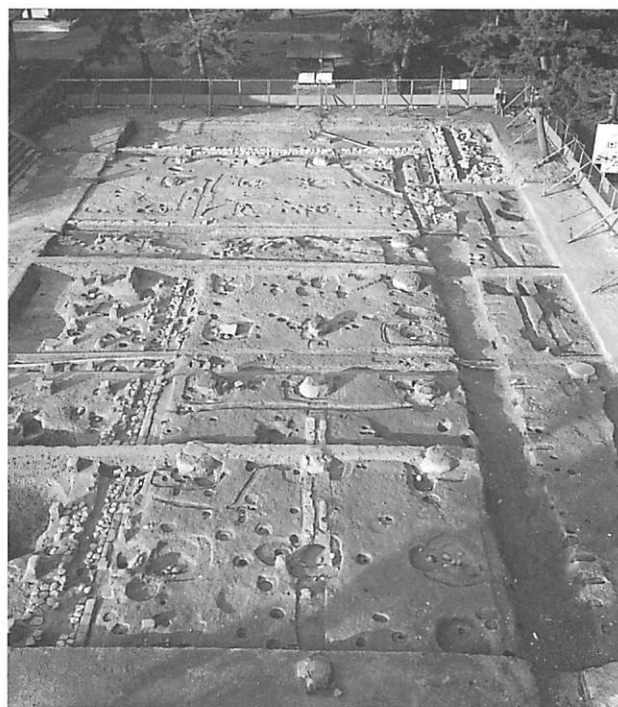


図33 中金堂院回廊（南から）

状況であり、断面の観察でも創建当初まで遡り得ず、古い時期の改修と考えられる。ただし、後述するように玉石敷きをはずして足場をたて、足場を撤去後、再び石を敷いた部分もあり、表面からは確認できない改修があるようだ。東面回廊東側でも部分的に凝灰岩B製の基壇地覆石列SX7506と玉石組雨落溝SD7507を検出した。溝幅は42～45cm。雨落溝外側には回廊内にみられたような玉石敷きはないが、溝とほぼ同時期の造作とみられるバラス敷きSX7508がある。以上から東面回廊の基壇の出は約1.8m（6.2尺）、軒の出は2.1m（7尺）に復原できる。

SC7510 北面回廊。現地地表下約10cmで遺構検出面である地山に達する。標高の最も高いのは中金堂に近い西端部で約95.5m。南北両側の基壇外装は現代の排水溝で破壊されているが、北側には玉石組雨落溝SD7516が残る。北面回廊は桁行2間分（隅部を含まず）を検出し、柱間寸法は、桁行4.16m（14尺）、梁行3.55m（12尺）。一部で棟通り地覆石の残がいと考えられる凝灰岩A片群SX7511を検出した。北雨落溝SD7516は、南北両側石・底石とも人頭大の河原石でつくられ、溝幅は約45cm。東行して東面回廊の東雨落溝につながるが、さらに延長して東僧房の西雨落溝にも連絡している。西端部は近世の遺構と考えられる花崗岩石列（SX7517）が側石を破壊して並ぶ。

SD7516の据付溝には瓦片や凝灰岩A片を含み、創建当初はおそらく凝灰岩A製の雨落溝であろう。また、基壇南辺部には中世の遺構と考えられる角板状の凝灰岩B列SX7518があるが、位置的・高さ的にみて基壇外装や敷石とは考えにくい。

SS7505・7515 抜取穴に濃赤色の焼土を多量に含む足場。基壇上だけでなく雨落溝付近にもあり、玉石敷きSX7504の下からも検出した。SS7505は東面回廊に、SS7515は北面回廊にともなう足場である。

SX7520 東面回廊の基壇上にある小穴。土師器2枚が重ねられた状態で出土し、土師器の年代観から、嘉暦焼失後の地鎮遺構と考えられる。

また、回廊隅部にある斜行溝SD7525からは12世紀の土師器が出土した。この斜行溝の性格は不明だが、治承焼失後の基壇改修時における排水溝と考えておく。

中金堂前庭部

前庭部の旧地形は、中金堂院中軸線付近はほぼ平坦なものの、東面回廊に近づくにつれ徐々に地山が下がり、谷地形となる。遺構は中軸線付近においては地山直上の整地土面で検出し、そのほかは地山上または谷地形を埋めた整地土上で検出した。

SB7530～7536 仮設建物。SB7530は前庭部やや内側にある桁行9間以上×梁行2間の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は桁行1.9m、梁行2.8m。柱穴から12世紀の土師器皿小片が出土した。SB7531～7533は東面回廊に内接する位置に建つ桁行10間以上×梁行4間の南北棟建物。SB7531は掘立柱建物で、柱位置をほぼ同じくして掘立柱

建物SB7532に建て替える。これらの柱穴からは12～13世紀の土師器皿が出土した。また、この2棟と柱位置を同じくする礎石建物SB7533がこの上層に建つ。SB7533の礎石据付掘形からは14世紀以降の瓦質土器が出土した。SB7531～7533は、いずれも身舎の梁行が2間で東西2面に庇がつく。柱間寸法は桁行約2.8m、梁行約1.9m、庇の出約2.1m。またSB7531～7533と重複する位置に建つSB7534は、桁行9間以上×梁行4間（身舎梁行2間+東西2面庇）の掘立柱南北棟建物。桁行2.0～2.7m、梁行2.1m。柱穴から14～15世紀の土師器皿が出土した。さらにこれらと重複する位置に建つSB7535は、桁行7間×梁行3間（身舎梁行2間+西庇）の掘立柱南北棟建物で、東庇がつく可能性もある。柱間寸法は桁行・梁行とも約2.1mで、西庇の出が約1.7m。柱穴は小ぶりですB7530～7535のうちでは、もっとも新しい建物である。SB7536は前庭部東端にある桁行6間以上×梁行2間の礎石建南北棟建物。桁行・梁行ともに柱間約1.95m。SB7536は明治以降の土坑SK7562よりも新しい。

SX7550 調査区北西部（中金堂南）にある玉石敷きの舗装。南端に見切りとなる石をならべており、これ以上南には続かない。石敷きの東西幅は不明なものの、現時点では中金堂基壇の前面だけに存在すると考えておく。断面観察の結果、創建当初につくられたものが部分的に改修をくり返しながら存続してきたようである。

SA7540 石敷きSX7550の約1m南に位置する柱間約1.5m（5尺）の掘立柱東西塀。石敷き東端以东には続かないため、ほぼ同時期の遺構と考えられる。



図34 北面回廊と基壇上の遺構（東から）



図35 前庭部全景（南西から）

Y=-15,220

Y=-15,210

Y=-15,200

Y=-15,190

Y=-15,180

Y=-15,170

Y=-15,160

中金堂

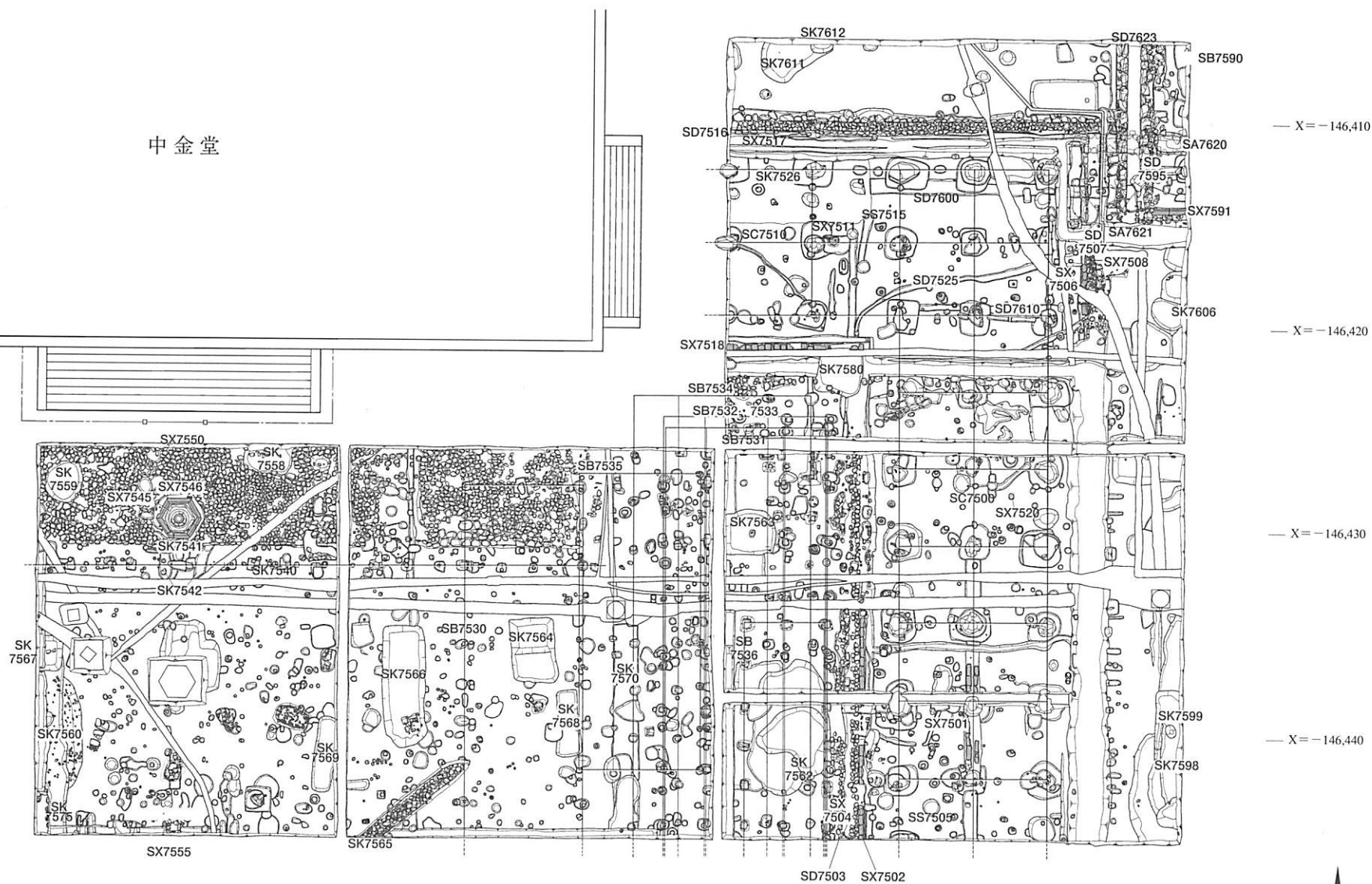


図36 第308次調査遺構平面図(1:300、中金堂基壇の位置は「興福寺境内現況図」(1995年作成)による)

SX7545 中金堂院の中軸線上、石敷きのなかにある花崗岩製の燈籠台石(図37)。径は約1.4m。磨滅しているものの、直径約95cm、八弁の蓮弁状線形をもつ突出部があり、その中央には竿石をさす直径36cm、深さ50cmほどの円形の穴を穿つ。台石の周囲には、幅25cm、長さ1.0m、厚さ12cmほどの地覆石状に加工した流紋岩質凝灰岩(奈良市地獄谷周辺産)を六角形にならべている(SX7546)。断面観察の結果、台石は平安時代頃に据え替えられたもので、SX7546はそれより新しい造作であることが判明した。また、台石には蓮弁外に現状とはまったく関係のない直線的な段差が4箇所残存し、それをつなぐと八角形に復原できるので、もともとは八角形に組んだ縁石で台石を固めていたのかもしれない。

また調査区南端の中軸線上にも、近世頃につくられた小燈籠の基礎と考えられる拳大の石組みSX7555がある。

SK7560 調査区西端部にある焼土・炭片を多量に含む瓦溜土坑。創建期の軒瓦のほか緑釉水波文塼(口絵)が出土した。出土遺物の年代観から永承元年焼失後の塵芥処理用土坑と考えられる。このほか前庭部では、大土坑(SK7564・7566~7569)や斜行石組み(SX7565)などを検出したが、その多くは明治以後の遺構である。

その他

SD7600 北面回廊北側柱筋のやや南にあって地山を掘り込む素掘りの東西溝(図34)。幅は約60~80cm、深さは部分的に異なり、深いところでは遺構検出面から30cmほど残る。埋土の状況から人工的に埋められた様相を呈する。断面観察の結果、回廊建立当初の礎石据付穴より

古いことが判明した。西方では回廊基壇造成にともなう地山削平によって溝も削られている。

SD7610 北面回廊南側柱筋のやや北にあって地山を掘り込む素掘りの東西溝。幅は約25~40cmでごく浅く、東と西では削平されている。これも回廊の据付穴より古い。SD7600とこのSD7610の2条の東西溝は溝幅の違いこそあれ平行しており、心心距離は約5.94m(20尺)をはかる。

SB7590 東僧房。調査区東北隅で東僧房の礎石を2石検出した。北の礎石は当初位置を保つが、南の礎石は北面回廊北側柱筋とそろえるものの、近代ごろにほぼ同位置で据えなおされている。基壇は地山の削り出しで版築土は確認できない。基壇南側には、創建当初のものとみられる幅32cm、厚さ15cmの凝灰岩A製地覆石列SX7591がある。上面には羽目石ののる仕口を施す。

SA7620・7621 明治21年(1891)ごろに設けられた築地塀。基底部の大石と、瓦が充填された積み土を検出した。調査区東端から西へ約5.2mのびたあと、南に折れて約4.0mで切れる。昭和36年(1961)に取り壊されて基底部だけが残ったものである。

SD7623 東僧房礎石の西2.6mに位置する石組みの南北溝。享保焼失後の遺構で、東僧房とは共存しない。

SK7611 調査区北端、北面回廊SC7510の北方にある瓦廃棄土坑。出土瓦から、元慶2年(878)に焼失した僧房にともなう廃棄土坑の可能性が高い。

SK7606 東僧房の南にある大土坑。治承4年(1180)の火災による廃棄土坑と考えられる。(箱崎和久)



図38 東僧房付近の遺構(南西から)

図37 燈籠台石とその周辺遺構(西から)

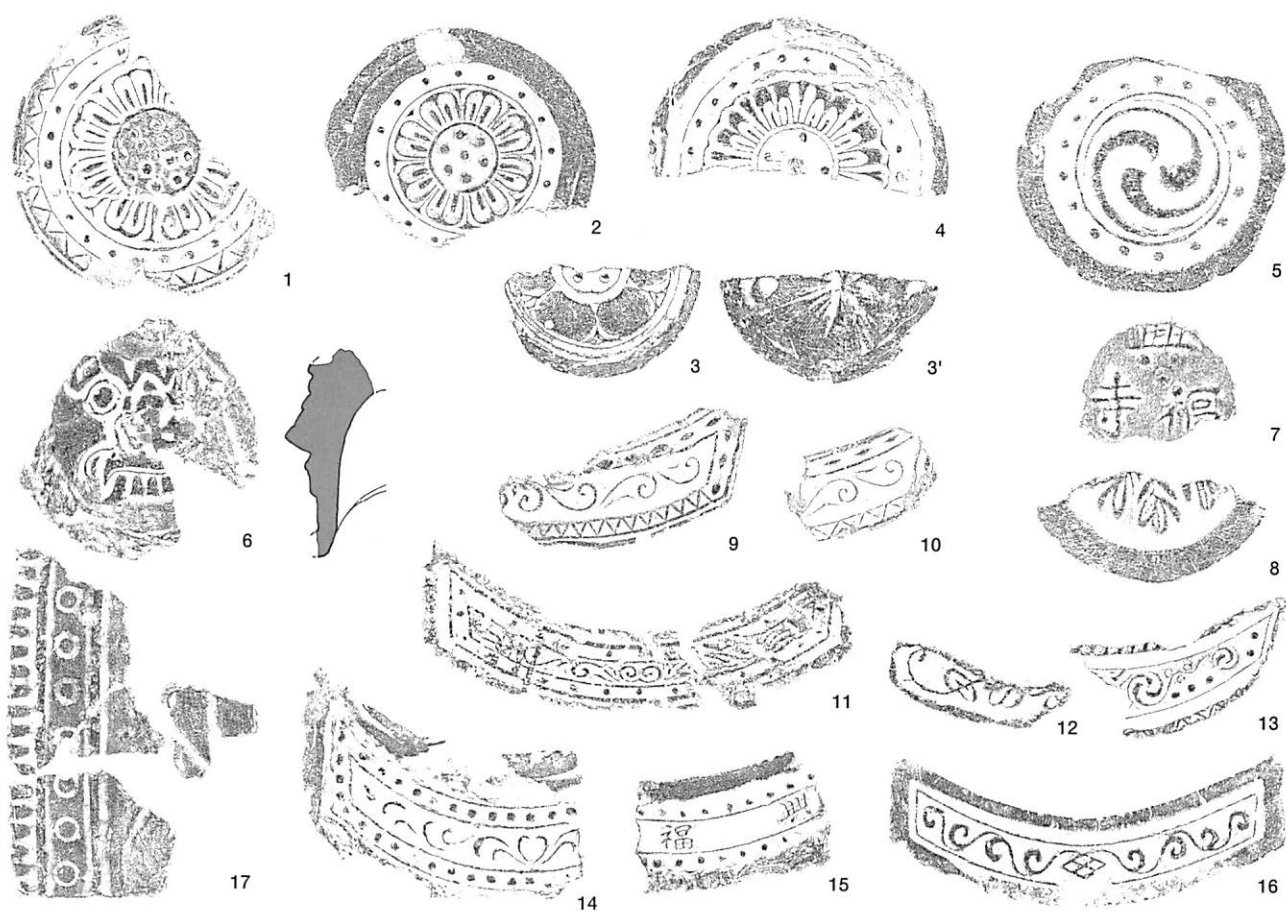


図39 第308次調査出土の軒瓦と鬼瓦 1:5

4. 出土遺物

瓦埴類

本調査では多種多量の瓦埴類が出土した。軒丸瓦214点、軒平瓦362点、丸瓦約15000点、平瓦約17000点、鬼瓦3点、隅木蓋瓦1点、緑釉水波文埴24点などが出土し、創建期から江戸時代におよぶ(図39)。

軒丸瓦 創建期の興福寺式6301は34点出土し、うち6301Aが7点、6301D(1)が5点。創建期の瓦として久米寺式6271Aもある。このほか奈良時代の瓦に6235A、6201Aなどがある。2・3は平安中期の瓦。3には、瓦当裏面に布しぼり目を残す(3')。出雲国分寺や平安宮内裏に類例があり、出雲産か。照合を要す。4は永承の火災以降～治承の兵火以前の瓦。5の三巴文軒丸瓦は14世紀代。6は鬼面文軒丸瓦(口絵)。鼻を高く表現する。他に類例が乏しく時期不明だが、平安時代のものか。7は寺名を表す中世の文字文瓦。瓦当面中央に菊花状の刻印を押す。外区・周縁が剥離。8は桐文軒丸瓦。五七の桐を飾る桃山期のもので、文様は2種ある。桐文軒丸瓦は6点出土し、うち3点に金箔を残す(口絵)。直径は約15cm。大和国での金箔瓦の出土ははじめて。

軒平瓦 興福寺式6671は38点出土し、うち6671A(9)が28点、6671E(10)が5点ある。11は平安前期の瓦。12は奈良市北小路遺跡出土品(『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅴ』)との同範を確認。13は薬師寺304(『薬師寺発掘調査報告』)とは部位が異なるが同範であろう。14は養和再建期のもの。以上は平安後期の瓦。15は寺名を表す文字文軒平瓦。16は四菱を中心飾りにもつ。ともに中世の瓦。

鬼瓦 17は鬼面文鬼瓦。鬼面の周縁に珠文帯と輻状文をめぐらす。厚さ約4cm。9世紀とされる平安宮内裏から出土した、周縁を三重にかざる鬼瓦(山本忠尚『鬼瓦』)の簡略化した表現とみられ、天徳4年(960)罹災後の四天王寺講堂再建時に使われたとされる一角鬼瓦(『四天王寺』)とも共通点があり、平安時代のものと推定しておく。

緑釉水波文埴 半肉彫りで水波文をあらわし、緑釉をかけた埴(口絵)。厚さ約1.5cm。全形は不明、隅は直角をなすもの以外に70度前後、110度前後のものを含む。火を受け釉の剥落が著しい。瓦溜SK7560から24点出土。出土状況から創建中金堂に使用されていたものとみられる。過去に東金堂から出土した緑釉水波文埴に比べ、厚さが半分ほどの薄い作りである。

(千田剛道)

金属製品・銭貨

金属製品 銅製品には、風鐸、飾金具、垂木先金具、歩瑤、鋌などがある。

風鐸は、中金堂前面の石敷きSX7550上の遺物包含層から破砕した状態で出土した。小片も含めて18点になる。全体の形状は不明であるが、「乳の間」とそれを区画する突線のありかたから、鐸身の一部と推定される。厚さは4.0mm～5.5mmで、幅3mm、高さ2mmの突線による1条の縦線と2条の横線により袈裟襷を構成する。区画された「乳の間」には縦3段以上の乳が配置される。乳は径8.5mm、高さ8mmの円筒形。裾部は、花卉状に大きく外反して広がるものと思われ、花卉の1単位は幅25cm前後になる。裾端部は「く」の字に外方に屈折し、厚さ4mmほどの縁をつくる。出土位置からみて中金堂東南隅に懸けられていた可能性がある。

その他の銅製品として、厚さ2.2～3.0mmの平板な飾金具片がある(図40)。蕨手状唐草文の主葉と子葉が相互に接する箇所は断片である。茎の幅9～11mm。表面には文様を縁取る線彫がおこなわれ、透彫の側縁は、表面から裏面に開きぎみに落とす。遺物包含層出土。

このような金具の類例に、奈良県大官大寺出土飾金具、大安寺出土飾金具がある。大官大寺例は、1974年の第1次調査で金堂(当初、講堂に比定されていた)基壇の東北隅および東南隅から出土した。出土位置と点数から隅木

端の飾金具と考えられている。縦約42cm、横約33cm。厚さ2mmの銅板の片面に文様を線彫し、その空間を透かしたものである(『年報1975』)。本例を重ね合わせると、唐草の茎の幅はほぼ一致し、同様の構成を取り巻きの強さ、向きの共通する部分が4箇所ある。本例の方が銅板が厚いこと、唐草の巻きがわずかに緩く、子葉部分も大きいため、文様構成自体がわずかに大きくなる。

このほか鉄製品として、断片も含めると100点を超す多量の釘のほか、鋌、火打金などが出土した。

銭貨 表土からの出土が多く、寛永通宝20枚以上を含む近世以降のもの29枚が出土した。

その他 中金堂院の罹災を示す遺物として、火熱を受けて硬化した壁土片がSK7526などから出土した。上塗と中塗・下塗に相当する壁構造を確認できるものもある。木製品はわずかであるが、SK7560からは部材片が出土している。1辺が約9cmの角材で、長さ23.5cm。樹種はスギ。このほか、石製品に砥石がある。(次山 淳)

土器

本調査では、整理箱で約20箱ぶんの土器が出土した。出土土器には土師器、須恵器、二彩・緑釉陶器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、および陶磁器があり、年代は奈良時代～近代にわたる。ここでは、遺構から出土した土器の概略を記すこととする。

回廊では、北面回廊南側柱と東面回廊東側柱の、各1基の礎石据付穴からそれぞれ土師器皿が出土した。2基ともに礎石の据え替えがあり、埋土には焼土を含む。土器はいずれも14世紀のもので、嘉暦焼失後の復興にともなうものと考えられる。

東面回廊基壇上の地鎮遺構SX7520からは、14世紀の土師器皿が出土した。嘉暦焼失後の再建時に基壇上に埋納したものであろう。また、北面回廊基壇上の斜行溝SD7525からは、多数の土師器皿が出土した。12世紀代のもので、治承焼失後の再建時に比定できる。

東面回廊西雨落溝SD7503の凝灰岩製側石の抜取溝からは、14世紀後半以降の瓦質土器の風炉が出土した。嘉暦焼失後の復興時のものであろう。また、中金堂前庭部にある仮設建物の柱穴からも、土師器皿や瓦質土器が出土している。それらの年代は、SB7531・7532は12～13世紀頃、SB7534は14～15世紀、SB7530は12世紀頃、SB7533は14世紀以降である。(玉田芳英)

図40 銅製飾金具片(1:2)および大官大寺出土隅木端金具復原図(1:6) アミ部分是对应位置

5. まとめ

回廊の形態を解明 中金堂院回廊は、ほぼ創建当初の形態をとどめていることが判明した。とくに、礎石の大部分は創建当初から使われており、基壇外装や雨落溝もほぼ当初位置を守って改修されてきている。なお、判明した中金堂院回廊北東部の規模は、東京国立博物館蔵『興福寺建築諸図』所収の回廊平面図（享保焼失以前の実測図）にのせる寸法とほぼ一致し、この平面図が中金堂院回廊の創建形態を表している可能性はきわめて大きい。

中金堂院前庭部の様相を解明 中金堂の南に石敷きの舗装を発見した。中金堂前だけを石敷きとする例はめずらしく、前庭部の使用方法や空間構成などについて、新たな資料を提供したといえる。また、前庭部で仮設建物を数棟を発見した。これらは、位置的・規模的にみても『春日社寺曼荼羅』（鎌倉時代：図41；個人蔵『古図にみる日本の建築』至文堂 1989より）に描かれた中軸線を挟んで対称の位置にある南北棟建物にきわめて類似する。このほか『造興福寺記』（永承元年（1046）火災後の復興記録）や『養和元年記』（治承4年（1180）火災後の復興記録）にみえる幄舎の記述、さらには享保14年『興福寺伽藍再建事始地曳并法会之記』所収の『興福寺伽藍地曳之図』（享保2年（1717）火災後の復興記録）にも同様の幄舎が描かれており、本調査で検出したこれらの建物も、このような儀式に用いる仮設の幄舎となる可能性が大きい。回廊内側では、上記の建物以外にも幄舎となるような掘立柱穴や礎石があり、復興の際は、ほぼ毎回同様な建物を建てて儀式をおこなっていたと推察される。なお『養和元年記』によれば、このような幄舎は竹柱で建てられ幔で覆われていた。このように、文献や絵画資料などから幄舎の存在は推定できたものの、発掘調査で確認した意義は大きいといえるだろう。

東僧房の一部を検出 部分的ながら、東僧房の礎石と基壇地覆石を検出した。このうち基壇地覆石は、いわゆる二上山産凝灰岩（遺構解説では凝灰岩Aとした）でつくられており、回廊部分ではみられなかった創建当初の基壇外装を残している。また、本調査によって東僧房付近の遺構も良好な遺存状況にあることが判明した。

金箔瓦の出土 出土遺物で最も注目すべきものは、大和国では初例、寺院跡からでも全国2例目となった金箔付

図41 『春日社寺曼荼羅』（興福寺部分）

き軒丸瓦であろう。文様から豊臣家との関係は疑いなく、『多聞院日記』の記載などから、秀吉が寄進した瓦とする見解もある。しかし、それを論証するには、金箔瓦研究のなかでこの軒丸瓦の位置づけを明確にすることが先決であり、その作業は別の機会に譲りたい。

回廊造営以前の溝を発見 回廊造営以前の平行する2条の東西溝を発見した。位置的な検討から、この溝は平城京三条条間南小路の南北両側溝に相当する可能性がある。これは外京の条坊復原だけでなく、興福寺の創建年代にもかかわる非常に重要な発見である。興福寺の創建には藤原不比等が関与し、諸記録では平城京遷都当初とするものの、元興寺や薬師寺・大安寺の例からみて和銅末～養老頃と理解されている。一方、溝の心間距離5.94mは小尺の20尺とみてよく、和銅6年（713）2月の度量衡改正以後に造られたと考えられる。すると、回廊の造営ひいては興福寺の創建がそれ以降であると理解せざるを得ない。このため、養老4年（720）8月の不比等没後、10月におかれた「造興福寺仏殿司」が興福寺造営の端緒とも考えられるが、すると今度は、不比等がどの程度興福寺造営に関与したのかが問題となってくる。今後の議論の展開を期待したい。

（箱崎）